

令和6年度 ボランティア養成セミナー 事業報告書

R6.5.25(土)~26(日) | 泊2日

◆ 目的

- ・ 青少年教育施設ボランティアに求められる知識・技能を習得し、教育事業や研修支援等の運営協力・指導補助などを担う人材を育成するとともに、ボランティア活動の推進及び充実を図る。
- ・ 青少年教育施設等でのボランティア活動の役割について理解を深める。

◆ 参加実績

- ・ 51名(内訳:高校生5名、大学生45名、社会人1名)

◆ 講師

- ・ 青木 康太郎 氏
(國學院大學 教授・国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター 客員研究員)
 - ・ 北見 靖直 氏
(国立能登青少年交流の家 所長)
- ※ どちらもオンライン開催

◆ 会場

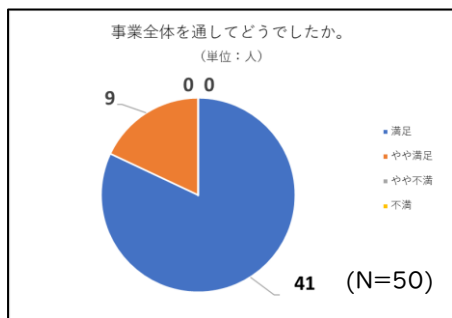
- ・ 国立若狭湾青少年自然の家

◆ 日程

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
5月25日(土)				受付	〔講義〕青少年教育施設の現状と運営 開講式・アイスブレイク	〔オンライン講義〕 「青少年教育」	昼食(食堂)			〔講義・演習〕 「安全管理・救命救急法等」		・ 野外炊事 などを実施	〔実技〕 「ボランティア活動の技術」	〔講義〕 「ボランティア活動の 活動内容理解」	休憩	入浴		就寝
5月26日(日)	起床	清掃	清掃・荷物移動 朝食(食堂)	〔オンライン講義〕 「ボランティア活動の意義」		〔実技〕 「ボランティア活動の技術」			休憩	〔法人ボランティアの 登録制度について〕	開講式							

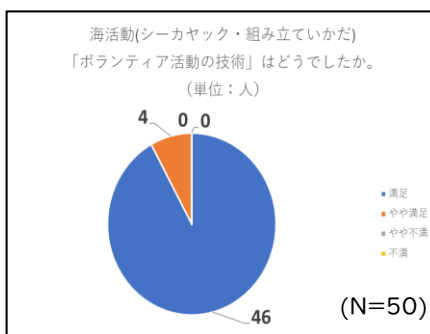
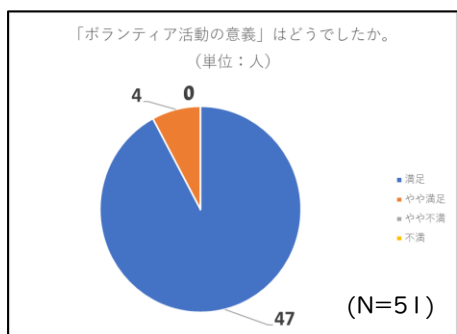
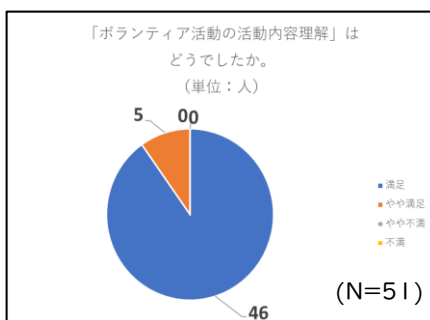
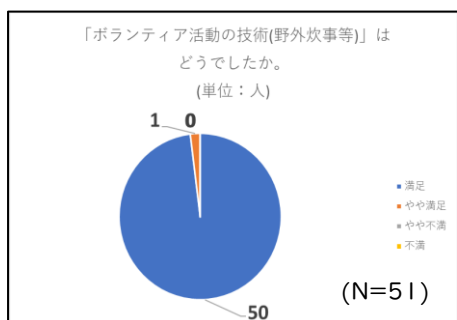
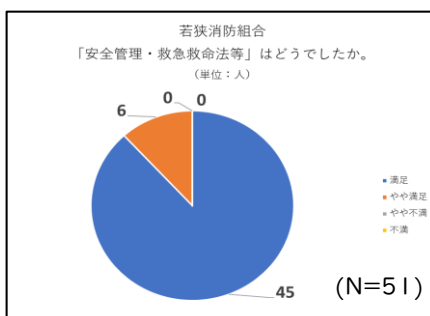
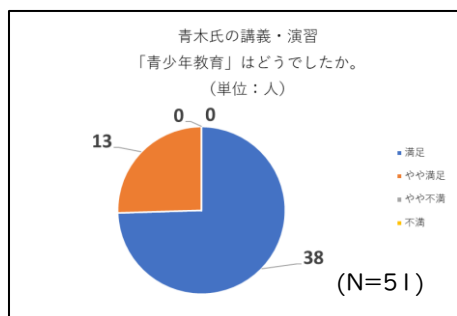
◆ 成果

◎「全体の満足度」に対して、51名中41名が「満足」と回答した。(未回答:1名) ※1



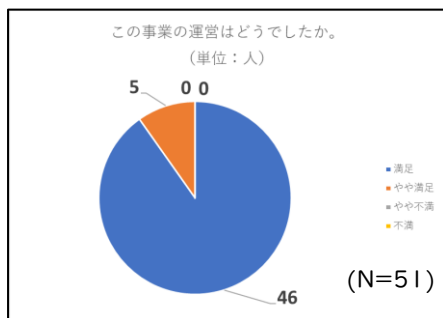
- ・ ボランティア活動をするうえで必要な知識や技術を講義や演習をとおして幅広く学ぶ機会となった。国立能登青少年交流の家(以下:能登)と合同で実施した講義もあり、講師の青木氏や北見氏が両施設の参加者が意見交換をできる場を設けてくださった。他施設の参加者と講義の中で交流する機会は、参加者にとっては貴重な時間だったと言える。
- ・ 今回は参加者を8グループに分けて講義や演習を行った。初対面の参加者が多かった様子だったが、各活動で声を掛け合ったり、グループを超えて交流したりする場面も見られ、活動を楽しんでいるようであった。先輩ボランティア(以下:先輩ボラ)も活動に加わり、先輩ボラの活躍が参加者により刺激を与えていたようにも思えた。

◎各講義や演習等の満足度は以下のとおりとなった。



- ・ 「青少年教育」や「ボランティア活動の意義」の講義において、子どもの立場で想像して考える場面や対象者に合わせたキャンプの企画などを行う場面があった。ボランティアに参加したことがなくても、グループワークで意見交換をしながら、子どもとの関わり方やボランティア活動時に配慮すべき点を学ぶ良い機会となった。
- ・ 野外炊事や海活動(シーカヤック、組み立ていかだ)は、小学生の時に体験したことのある参加者もあり、子どもの頃の気持ちを思い出しながら活動をする機会となっていた。グループの仲間と協力する場面だけでなく、安全に配慮すべき点なども参加者同士で確認しあいながら、活動に取り組むことができていた。

・ 「事業の運営」の満足度は、以下のとおりとなった。



- ・ 担当職員だけで打合せをただけでなく、先輩ボランティアにも事前にこまめな連絡を取ったことで当日に臨機応変な対応をすることができた。
- ・ 参加者が職員や先輩ボラとじっくり話をする機会が、野外炊事や海活動の時間のみになってしまったため、来年度は職員や先輩ボラとともに体験をする機会を増やし、自然の家の良さや活動内容の詳細を紹介できるとボランティアの興味関心も深まるのではないかと感じた。

◆ 参加者の声

(事業全体を通して)

- ・ いろんな場面を想定して自分ならどうするか考えたことが印象に残った。
- ・ 初めて会う人と協力し合うことで、2日間で仲良くなることができた。子どもたちにもこのような楽しかった気持ちで帰ってほしいと感じた。
- ・ 先輩、後輩関係なく、みんな同じ活躍度が求められる。もっと頑張りたい。

(「青少年教育」の講義・演習について)

- ・ グループワークで、自分の考えを深めることができた。能登の参加者の意見も聞くことができてよかった。
- ・ 子どもとの正しい向き合い方を学びました。
- ・ (ボランティアをすることで) 多様な人々と出会えることはとても魅力的だと感じました。

(「安全管理・救急救命法等」の演習について)

- ・ 実際に心肺蘇生を体験してみると、思っているより上手いかなかった。
- ・ 1人を助けるために、体力と協力が必要だということ。
- ・ 胸骨圧迫のリレーで6分間が長く感じた。

(「ボランティア活動の技術(野外炊事)」について)

- ・ 野外炊事で火をつけるのにも苦戦して、今、簡単に料理をしているのは当たり前のことではないのだと思いました。

- ・ 班のみんなで作ったカレーはとてもおいしかった。
- ・ 薪割りや火おこしから始めるところが新鮮で楽しかったです。

(「ボランティア活動の内容理解」の講義について)

- ・ 実際の体験や経験を聞いて、自分もいつか話せる立場になりたいと思いました。
- ・ ボランティアは、親でも先生でもない立場だからこそできることがあることを知れました。
- ・ 先輩たちが本当にたくさん考えて自分自身も楽しんでいることがわかって、自分もこんな風になりたいと強く感じました。

(「ボランティアの活動の意義」の講義・演習について)

- ・ 「子ども達は嘘を見抜く」という言葉が印象に残っている。
- ・ あるがままの意見に肯定してあげることの大切さを学んだ。
- ・ 小学生などと触れあうことで、自分たちも成長できるのかなと考えました。

(「ボランティア活動の技術」について)

- ・ 海の波のおそろしさも感じることができました。
- ・ 海に入ることができてとても楽しかったです。いかだ作りやシーカヤックなど普段できないことができてよかった。
- ・ 海、山などの自然に触れあえるのがいいと思いました。

(事業運営・職員の指導や助言について)

- ・ 要点を伝えながら楽しい雰囲気を作ってくれてとてもよかった。
- ・ 時間がおおしても柔軟に対応していてよかった。
- ・ 講義と実践を混合させたことですごく取り組みやすかったです。

◆ 先輩ボランティアの事後アンケートより

- ・ プログラム内容が充実していて、能登と合同で講師を招いた青少年教育(の講義)を行ったり、若狭の1番の魅力である海活動を体験でき、今後ボランティアに必要な知識・技能が伝わった。
- ・ 自分がボランティアを目指した原点に立つことができ、他のボランティアからも目指した理由や魅力を聞いたりもしていたので、様々な価値観・想いをもってボラとして参加しているのだなと感じた。異なる価値観・想いをもって集合し、ボラという集団で活動していることについて感慨深く感じた。
- ・ 今回のボラセミでは高校生から社会人までの幅広い年齢の方が参加していたため、そのような場合の時にボランティアとしての立ち位置や関わり方など、3日間を通して学んだことを今後のボランティアに生かしていきたいと感じた。
- ・ 募集人数を減らしてほしい。もっと参加者一人一人とコミュニケーションをとりたい。名札の後ろにキャンプネームを書いてもらう。施設の使い方の説明時間をとる。

◆ 事業運営のツボ・工夫・反省

(ツボ・工夫)

- ・ 参加者の事業全体の評価は、「満足」と「やや満足」と答えた人が100%であり、満足した事業を実施することができた(※1)。
- ・ 当日の講義や演習の活動時間の確保のために、「青少年教育施設の現状と運営」と「安全管理・救急救命法等」の講義においては、事前にオンラインで動画視聴とした。
- ・ 広報では、チラシを近隣だけでなく、隣県(滋賀県、京都府、大阪府、岐阜県、愛知県)の大学や専門学校等にも配布した。また、チラシ配布だけでなく若狭湾のInstagramでも定期的に応報をした。4月初旬から広報を開始したことで、定員を超える51名の参加者が集まった。
- ・ 一部の講義を能登と合同でオンラインで実施したことにより、予算の軽減につながった。事前に、能登の担当職員と会場からオンラインの接続の確認を行ったことや、当日も講義前に音声やマイクの確認や複数の機器でもバックアップを備えておいたことから、スムーズに進行することができた。
- ・ 青木氏の「青少年教育」の講義において、リアルタイムアンケートの「Imakiku(イマキク)」を活用した。その場ですぐに匿名アンケートを取ることのできるアプリ不要のアンケートで、参加者は他の参加者の回答を見ながら興味深く講義を受けている様子が見られた。匿名アンケートという点では、気軽に自分の意見を発信しやすいため、今後の講義形式の事業でも積極的に活用したい。
- ・ 「ボランティア活動の内容理解」の講義において、先輩ボランティア2名と事前に発表資料の確認を行い、参加者に伝える内容や参加者への働きかけ方などを共有した。参加者のアンケートからも、「先輩方のようなボランティアを目指したい」という声が挙がり、貴重な時間であったと考える。
- ・ 2日目の「ボランティア活動の技術」の演習において、シーカヤックと組み立ていかだを行った。若狭湾の豊かな自然を体験する機会となっただけでなく、安全面で気を付けるべき点も学ぶことができた。

(反省・課題)

- ・ 講義と講義の合間が短く、参加者の休憩時間や次の講義場所への移動時間の余裕がなかった。来年度は、講義終了後に次の講義のアナウンスを口頭でするだけでなく、研修室に日程を掲示し、セミナーの流れを分かりやすく伝えるようにしたい。また、自然の家を初めて利用する参加者が多い場合は活動場所までの移動に時間がかかることも想定されるため、先輩ボラの協力も得ながら誘導をしたい。
- ・ オンラインの接続は問題なかったが、音声途中で聞きづらくなるがあった。オンライン講義の場合は、参加者が集中して講話を聞くことに限界があると感じた。
- ・ 参加申込フォームに緊急連絡先の項目をいれておらず、当日キャンセルの参加者と連絡が取ることができなかった。緊急時に保護者と確実に連絡がとれるよう、どの事業でも申込時に確認するようにしたい。
- ・ 昨年と同様、先輩ボラ2名に事業のサポートを依頼した。今回は「ボランティア活動の内容理解」の講義の担当がメインとなったが、参加者の生活面の指導にも関わってもらうことも必要だと感じた。来年度以降は普通の事業と同様、若狭湾ボランティアから先輩ボラを募集し、班付きリーダーとして活動できるように考えていきたい。
- ・ 若狭消防組合の方より、5月下旬は市内の消防訓練の時期と重なるため、ボランティア養成セミナーの実施時期について来年度以降は早めに相談したいというお話があった。日程が合わない場合は、日本赤十字社の方に講習を依頼することも検討したい。

◆ 活動写真



集合写真



開講式(所長挨拶)



アイスブレイクの様子



「青少年教育(青木氏)」講義の様子



「安全管理・救急救命法等」
演習の様子



5/25 夜 「ボランティア活動の技術(野外炊事)」の様子



「ボランティア活動の内容理解」講義の様子



「ボランティア活動の意義(北見氏)」講義の様子



5/26 昼 「ボランティア活動の技術(シーカヤック、組み立ていかだ)」の様子



閉講式(次長挨拶)